

結び＝21世紀型カリキュラムは学校
(school-based) 政策を中核として展開す
る

- 1) 学校改革＝学びの質 (quality) の追求、授業と学びの革新、専門家共同体の形成
- 2) 学校改革を促進するカリキュラム開発＝curriculum design、curriculum shaping の概念
- 3) 教科書の革新、学習資料・環境の開発
- 4) カリキュラム政策 (policy) の転換＝中央レベル・(市町村) 教育委員会レベル、学校レベル、教室レベルの多層的な政策の革新が必要。
- 5) カリキュラム政策<ヴィジョンと哲学><資源 (文化的、人的、財政的)><デザイン＝実践><評価＝省察>の研究の進展が求められる。

図 11

「学校改革を促進するカリキュラム」。カリキュラムはデザイン、あるいはシェイピングする(形づくる)ものです。カリキュラムコンストラクションという建築メタファーではなく、デザインメタファー、さらには手づくりメタファー、手でつくるというイメージです。子どもと教師がそこにどうつくり上げたか、あるいは子どもとともにどうつくり上げたかというレベルの議論が重要になってきました。そうすると、やはり学校単位で考えながら、行政全体の質ということになってくると思います。

教科書は本当に日本の場合には大きな問題です。はっきり申し上げて、日本の教科書はまづもって薄い。先進のほかの国と比べて6分の1ぐらいの薄さです。だから詰め込みになってしまうのです。フィンランドの場合は、中学校の数学だけで日本の5倍ぐらいの教科書を8冊使います。生物でもその大きさの教科書を7冊使うのです。ですから、学習のリソースをどう豊かにするのかということは、カリキュラムの構造上、大きな問題です。

それから環境です。電子黒板等を含めて、コンピューターの環境による学習支援の環境が教室レベルでつくられる必要があります。

それからポリシーの問題で、学校単位としながら、各政策決定レベルでの役割と機能、責任をはっきりする必要があります。そうすると、カリキュラム政策は幾つか問題力を持っています。まず、ヴィジ

ョンと哲学をめぐる問題力です。それから資源(リソース)で、ここでいう資源とは文化的リソース、人的リソース、財政的リソースです。これらのリソースをどのようにポリシーに組み込むか。それから、デザインです。どのような授業や学びの様式を想定しながら、あるいは学校の組織の在り方を構想しながら、カリキュラムの内容を決めるか。さらには、さまざまな取り組みをどのように評価し、システムとして機能させていくのか。こういう内容構成について議論にかけてもらって、全体像は多分10年後には、というより、今から生まれてくるのではないかというのが私の意見です。

セッションⅡ

カリキュラムの新たな構成要素

「言語力を育てるカリキュラムと授業のために」

秋田 喜代美(教育心理学コース)

ことばの教育とカリキュラム

国際学力テストでも、日常の生活の中でも、学ぶ力の根幹として言葉の力が低下しているのではないと言われるようになってきています(図1)。特にメディアによる情報化やグローバル化の中で、携帯電話に象徴されるように、つながりたい、しかし非常に薄い言葉、軽い言葉が氾濫している。むしろじっくりと沈黙して自分の言葉を考える時間や、そこに対する恐れも、中等教育の実際の教室の場で会う生徒たちにはあるのではないかと思うことがあります。また、頻繁にコミュニケーションを取りたいというのは、他者と違うことを意識するのではなく、内輪、仲間うちだということです。言葉を交わすことによって異質性や自分の特異性・独自性を自覚する、あるいは他者を承認する機能は弱まってきており、内輪のおしゃべり的な会話がさまざまなところでネットワークとしてできているのが現在ではないかと思います。

ことばの教育とカリキュラム

- 学ぶ力の根幹としての読解力低下の議論
- 情報化、グローバル化の中での変化として
 - ・・・つながりを希求する軽い言葉の氾濫と沈黙への恐れ
 - ・・・言葉をかかわることによる異質性、特異性の自覚と承認によるアイデンティティ形成の機能が弱まっている。
 - ・・・日本語のよさと言葉の豊かさや美しさの感覚の衰退
 - ・・・ビジュアルメディアによる活字、本の文化の衰退

図1

そして、日本語の良さと言葉の豊かさや美しさという感覚、語彙の低下があります。私は実際に言葉の問題で読書等にもかかわっていますが、ビジュアルメディアによって本当に本が売れなくなっています。電車の中を見てもよくわかりますが、大人も携帯を見ているの方が文庫本を読んでいる人よりもはるかに多く、本の文化の衰退という問題が背景にあるように思います。

新学習指導要領における「言語力の育成」

先ほど市川先生から、新学習指導要領における言語力の育成部会という横割りの部会ができたというお話がありました。私はそちらに入れていただき、議論をしました。ここにご参加の多くの方が既にご存じの内容だと思えます。そこにいた委員によっても説明の仕方や解釈が多様だということも問題ですが、私自身が論点だと思っているのは次の4点です(図2)。

まず、言語機能として、コミュニケーション機能と同時に、思考を深めていく機能、言葉の機能を大事に教育していくこと。

二つ目は、私も強く申し上げたところですが、言語力をテストで測れる個人学力としてとらえるのではなく、協働でより深い思考や表現へと導く言葉の働きとして、学級集団の関係の力を育成することが報告書に盛り込まれています。

新学習指導要領における「言語力の育成」

- 言語機能：コミュニケーション機能と思考深化機能
- 言語力の認識：個人内能力だけではなく、協働でより深い思考や表現へと導く言葉の働きを重視。
学級集団関係の力を育成
- すべての教科を対象：各教科固有の学習語彙やリテラシーの習得（学習語彙、教科表記・表現）
- 文化的実践としての言語活動：活動の道具（本、辞書、新聞、レファレンスなど）、言語教養としての各言語文化固有の知識習得（古典、詩歌など）、活動の場としての学校図書館等の活用

図2

三つ目は、すべての教科で学習の基本となる語彙やリテラシー、各教科固有の言葉や表記・表現をきちんと習得できるようにしていくことです。

そして四つ目として、「なぜ学ぶのか」というときに、文化的な実践として言葉を考えていく。そのためには教科書やノートだけではなく、さまざまな本、辞書、新聞、レファレンスがあります。例えば小学校1年生や2年生でも辞書が使われている教室のようなどころから、言語教養としての言語固有の知識習得、日本固有の古典や詩歌などに出会う場、活動の場としての学校図書館までの様々な言語的実践の「場」の重要性という点が挙げられています。

改訂点に対応して問われること

新学習指導要領というナショナルカリキュラムの問題で、これを実施していくときに、そしてさらに次の改訂において大事なことは、結局どの学校でも言葉の力は大事だということです。そして、それをいかに実現するかは、各学校が学校のシステムとしてどのようにつくり上げていくのか、そして先生たちがご自身でそれをどのように考えていくのかというところにあるのではないかと思います。

それを、今の改訂点の四つと対応させてみます(図3)。

改訂点に対応して問われること

- 言葉で表現し対話することや、教材の言葉や事実に戻り吟味することで理解を深めることが、授業の中でどれだけ行なわれているか？
- クラスの中でさまざまな活動を通して協働で言葉で表現することで学びあう力や風土の育成がなされているか？
- 国語のみならず各教科で、
体験・直感・日常言語・表現・学問用語・概念・表記
の相互関連をつなぐ指導が体系的になされているか？
- 教科書とノートだけではなくさまざまな外部資源や場を
活用することで、学問教養の世界を広げているか？

図3

まず、具体的に言葉で表現し対話することや、教材の言葉や事実に戻り吟味するという授業が日々さまざまな教科の中でどれだけ行なわれているのか。

二つ目としては、クラスの中でさまざまな活動を通して、協働で、言葉で表現しあいながら学びあう風土がそれぞれの学級や学校の中にどのように培われているのか。それを吟味し、子ども、生徒の経験によるカリキュラムとして表現能力がどのように育っている内容かをとらえることが、実際のカリキュラムの問題として重要ではないかと思います。

三つ目として、それは決して国語だけの問題ではなく各教科で行われるということです。体験と言語が今回のポイント概念の一つです。単に体験するだけの教室ではなく、学習行為だけを言語で定義して説明する教室でもなく、体験・直感と、日常の生徒の中からわき出てくる教材と出合ったときの言葉や表現、さらに学問の用語や概念とのつながりをいかに理解し、体系的に説明されているのかが重要なところだと思います。

四つ目に、教科書とノートだけではなく、さまざまな外部資源や場を活用することで、生徒自身が先生の持っている世界だけではなく、さらに広がりのある学問教養の世界を広げているか。実は今回の要領でも、学校レベル・教室レベルのカリキュラムの問題として問われていると思います。

私が言葉の問題を言うと、「もっと教科内容が大事

ではないですか」と言われますが、よく申し上げるのは、日本人はご飯をよく食べます。日々のご飯をいかにうまく炊くか。それは、毎日食べるものだからこそ良質にしたいわけですが、フランス料理、中華料理、いろいろな料理があつていいのです。その中でも、それをどのように料理するかという議論も必要です。しかし、ある校長が、「今、環境教育や法教育、経済教育、心理学教育など、それらをみんな中高生からやったらいいと、いろいろな学者が言っているけれど、その通達や情報だけで100種類ぐらゐあり、さらにまた〇〇教育が増えるのか」とおっしゃっていました。われわれは、本当に骨になるものが何であるのかを吟味して、洗練されたカリキュラムを作っていくことが重要だと思います。その一つとして、言葉の問題を抜くことはできないと考えています。

言語力が育つ場での課題

実際に、学力の低い子は「どうやって勉強したらいいのかわからない。学習の方法がわからない」という言葉の問題が出てくるのです(図4)。ですから、反復の単純な学習以外に、言葉の学習の方法がわからない、何のために学ぶのかわからない。

言語力が育つ場での課題

- 生徒 国語はどのように学習したらよいかわからない。勉強の仕方がわからない。何のために学ぶかみえない。
- 教師
 - ・コミュニケーションが教師からの情報提示、生徒同士の話し合いと同値に置き換えられ、量と活発さに注目。思考する課題と考えるための間の構成、思考する言葉の質とそのプロセスが議論されることが少ない。
 - ・「教材と子どもをつなぐ」「子どもと子どもをつなぐ」ための言葉の指導が体系的に実施されていることが少ない。
 - ・良質の言語文化、言語作品と出会う機会が設けられていない。教師が言語の教養と文化にふれていない。

図4

先生側の課題としては、コミュニケーションが先生からの情報提示と、生徒同士の話し合いが同値に置き換えられ、量と活発さに注目されていないか。

実は考えて「もうちょっと」というときに、先生が大概「次に行くよ」と、生徒が考え始めたときに進むのですね。でも、実はその考える間や、思考する言葉の質とそのプロセスの吟味こそが、カリキュラムの問題を質の問題に変えていきます。また、「教材と子どもをつなぐ」「子どもと子どもをつなぐ」ための言葉の指導が体系的に実施されているという意識が少ないのではないのか。そして、良質の言語文化、言語作品と出会う機会が設けられていない。実は、朝日新聞に9月に出ると思いますが、「どくしょ甲子園」を立ち上げました。一人で読むのではなく、4～5人のグループで本を活用しながら読みあいをしていきます。その作品がたくさん私のところに届いて、読ませてもらいました。その高校生の選ぶ本の質が、宮沢賢治が悪いのではないのですが、小学校・中学校で読んだ作品が多いなど、高次の質の作品が極めて少ないのです。それは実は、教師が言葉の教養と文化に触れておらず、子どもたちが、より高次の書物に開かれていないという課題があるのではないかと思います。

それは学校で先生方のところにうかがっても、言葉のカリキュラムは言葉を議論しない限り豊かにはならないのですが、授業研究や校内研修では一般的方法論や教材の話が多くて、授業中の具体的な言葉に触れて議論できるという専門的力量が必ずしも十分とは言えません(図5)。ハーバードのプロジェクト・ゼロで教師教育の人たちとメールなどでコンタクトしていると、今、see、think、wonder というものをきっちり分けながら考えています。大体 think で何となく私はこう考える、wonder でこのように変えたいのではないですかとだけ言っている人たちは、実は言葉の問題、言葉の事実の see が見えていないのです。see、think、wonder のつながりが教室の言葉を豊かにしていくと思います。

そして、言葉と表現の差異を重視するということです。

□学校

- ・授業研究や校内研修でも一般的な方法論や教材の話が多く、授業中の具体的な言葉にふれて議論できる機会と専門的力量が十分とはいえない。

- ・児童生徒の言葉、表現の差異より、考え方の違いだけが論じられ、精緻化による理解深化過程を重視した議論が時間との関係で少なくなっている。

図5

学びあう授業での言葉の力の要素

今まで自動化、熟達化の部分の処理過程が言語能力としてよく指摘されてきました(図6)。学力の低い子ほど、自動化、熟達化の必要性を議論してきました。しかし、これからの授業、カリキュラムで大事なことは、対象や状況、他者との協働に応じ、関与しながら相互に理解を深めるための言葉をどのように培っていくのかというところ です。学力の低い子ほど、自動化の処理を練習させられます。それで高次の思考としてメタ認知を育てたり、状況に応じた理解を考えることが、これからの言葉のカリキュラムの中の重要な点だと思います。

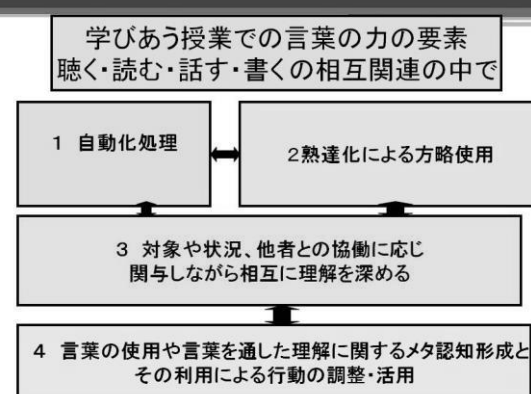


図6

学びの習慣としての聴くことの指導

その一例として、話し方の指導と読み方の指導はよく言われるのですが、聴き方の指導は明確になされていません(図7)。私の研究室で、修論で、英語の授業で何を聴いているかを調べた学生がいます。学力の高い子は英語を聴いていますが、学力の低い子は友達と日本語で支えられて授業に参加しているのです。自動化だけではなくて、どうやって聴いたらいいのかというルールを明確にしています。先生がたくさんしゃべることということは、教師は聴き方のモデルではなく、話し方のモデルしか示していません。そういう教室ではなく、状況に応じてどのように聴くのか。また聴くことと、ノートや問い方などの関連のカリキュラムを作っていくことが大事です。

例 学びの習慣としての聴くことの指導

聴き応えある内容と技能が身につく指導

- 1 自動化 語彙の豊かさ
聴く一見の関係、身体的な集中、没頭
- 2 方略 いくつかの水準の聴き方の熟達
教室でのグラウンドルールとしての提示
- 3 状況に応じた聴き方
言語的、非言語的な宛名性と応答性
割り込みをしない、人数に応じた談話ルール
- 4 聴くことと話す、読む、書くの行動の関連付け
訳き方(話す)、ノートやメモ(書く)、
板書とMyノート(読む)

図7

聴くことの方略

各教科の中で、例えば聴取がどのようにより高次になっていくのか、それを学校として育てていくことが大事ではないかと思います(図8)。

聴くことの方略 (一柳、2009から)

- A 態度：正しい姿勢を取る、話し手の方に姿勢をむける、自分の言いたいことを抑え、まず他の人の話に耳を傾ける
- B 発言の客観的な理解：内容を正しく聴き取る、言葉の間違いに気付く
- C 話者に寄り添う聴取：話者に共感的になる、話者の発言背景を推論、話の内容を思い浮かべ聴く、自分の知識に固執しない
- D 発言文脈に即した理解：要点把握、内容をそれ以前の話と関連付けて捉える、先を予測して聴く
- E 批判的聴き方：自分の考えと批判的に結びつける話から新しいことを発見する、疑問と照らして聴く
自分の考えとの内容の相違を把握、聴取内容で不明点を明確化、自分の言いたい内容をより明確化

図8

そして、学校の中で使う道具も、これ(図9)を見ていただくと、大きな黒板ではありません。小黒板が各グループにあり、並べると一望の下に、どのように表現し、考えていくのかという、質の高い議論ができます。そのためのボードです(写真提供 福井市率立至民中学校)。

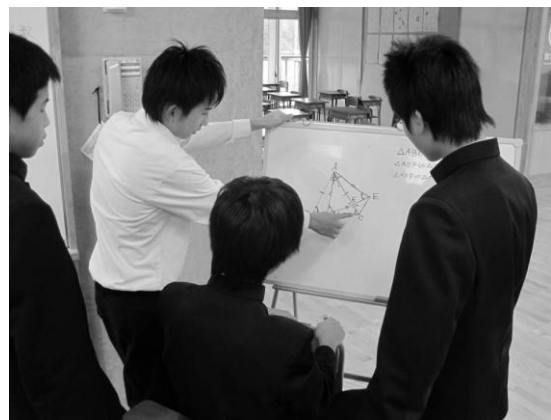


図9

しかし、ボードだけだといつも消せます。消せないようにしながら、より精緻に、もう一度見直しをしながら表現する過程もできます(図10)。(同上)



図 10

振り返りの視点

また、聴くことと同時に、聴いたことを振り返るとい
う視点が大切です。例えばこれ(図 11)は小学校で
すが、学校全体でカリキュラムの中に言葉を育てる
ため、振り返りを単に 5 段階評価するのではなく、
日々書きながら、その書き方の中で育てていくよう
なカリキュラムを作っています(資料提供 郡山市芳
山小学校)。こうした形で、もちろんナショナルカリキ
ュラムの影響がありますが、言葉の力をスクールベ
ースカリキュラムで考えていくことが大事です。

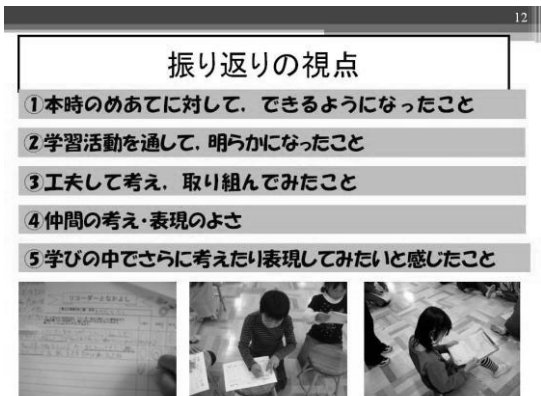


図 11

カリキュラムの連続性と学校文化の中での言葉の育成

各教科の中で、また教科書の中(メタディスコー
ス)でどのように表現されているのか(図 12)。そして、

最後に私が申し上げたいのは、帯カリキュラムで、
教科だけではなくて、例えば特別活動等の 10 分間
か 15 分間に、その学校の理念がよく表れます。そ
れを学び直しの時間と考えるのか、ドリルの時間と
考えるのか。例えば読書、スピーチ、つづり方とい
ったさまざまな内容を入れた特別活動の活用により、
今後言葉の育成のカリキュラムを一方で考えていく
ことが必要だと思います。

カリキュラムの連続性と学校文化の中での言葉の育成

- 教科国語だけではなく、各教科(各単元内、単元間、
学年間)での連続した意図的指導
学びの習慣としての言語活動の知識と技能の
育成カリキュラム
- 教科書における言葉の問題
メタディスコースの構成、教材の広がり
- 帯カリキュラム、特別活動等の活用
読書(10分間読書、協働読書会など)
スピーチ、朗読、
教科日記、生活日記、文集・本作り

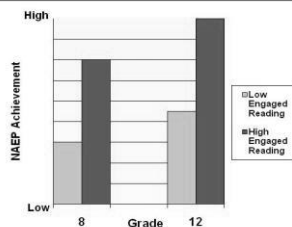
図 12

いくら方法を言っても、一番重要なことは、「生徒
がどれだけ没頭できるか」なのです。これ(図 13)は
アメリカのデータですが、8年生(中2)と12年生(高
3)のときの伸びです(Gurtherie,2004)。読書などに
集中した経験がある子どもは、グリーンのところの伸
びがいかに大きいかわかります。要するに、授業中
に集中した経験の少ない子は学力の伸びが少ない
のです。当たり前のことですが、子どもたちに参加
してもらいながら言葉の教育をしていくというカリキ
ュラムが重要ではないでしょうか。

図書館とメディアをめぐるカリキュラム

言葉の文化の中核には、図書館の活用が常にあ
ると私は思っています。デューイの言葉(図 14)で
すが、「自らの経験に光を与え、他人の経験から来
る新しい光、世界の叡知の集積から来る新しい光を
子どもに投げかける場所」としての図書館、体験を
振り返る場としての言葉。しかもこの映像を見ていた

没頭できる読み(学習)が学力の伸びを保障する



COR100 copyright by John T. Guthrie. All rights reserved, Mar 1, 2004

図 13

だと、一人で読んでいません。私が勧めているのは、一人の読書だけではなく、協働で読むことで、より高次の質のものを読み解いていく。そして、そこに異質性というものを小グループの中でやっていく。例えば「どくしょ甲子園」の文化をつくらうと思っています。ブックスタートは全国の4割の自治体で実施され、赤ちゃんに言葉の文化をつくり出していこうとしています。こういう活動も、小学校の授業等でもそうですが、中高生が協働で読み合いながら、自分たちの言葉でキャッチコピーなどを作りながら、言葉と出会い、そのプロセスを見つめるようなことが重要ではないかと私自身は考えています。

15

言葉の文化の中核としての図書館とメディアをめぐるカリキュラム



「自らの経験に光を与え、他人の経験からくる新しい光、世界の叡智の集積から来る新しい光を子どもに投げかける場所、新たな意味を見出し、自由な価値を与える場所としての学校図書館」
デューイ
『学校と社会』1957

図 14

古い話ですが、言葉の教育は、大村はまの言う「ことばを育てることは ころを育てること 人を育

てること 教育そのものである」「話しことばは、そのひびきの中にこそ、その人の心を聴く」という言葉の中にあると思うのです。

この写真(図 15)を見ていただくと、これは一斉型の形式で、右側の真ん中の子はわかった瞬間の笑いですし、教室の聴き合う文化ができてい学校には、机間指導などで回っているときに、子どもの目線よりも低い位置取りで対話している教師の姿が必ずあります(写真提供 郡山市立芳山小学校)。こうした形で、常に上から目線で方法やカリキュラムという問題を考えるのではなく、もう一度、子どもの言葉の中から言葉の経験を考えていく。ナショナルカリキュラムも大事ですが、言葉のカリキュラムをつくることは、学校の文化をつくり出すことだと私は思っています。どのようにつくっていったとしても、恐らくそこに学校の文化があり、そこに質の高い言葉の教育とは何かを考えるかぎがあると思います。

16

「ことばを育てることは ころを育てること
人を育てること 教育そのものである。」
「話しことばは、そのひびきの中にこそ、
その人の心を聴く」大村はま
ご清聴ありがとうございました。



図 15